

【東京】ホームレス支援のきっかけは「被災地で見たおばあちゃん笑顔」-森川すいめい・ゆうりんクリニック医師に聞く◆Vol.2

2022年7月22日（金）配信 m3.com地域版

生まれ育った池袋で20年間、ホームレスの人の支援活動を続ける精神科医の森川すいめい氏。森川氏が長く熱量を持って活動してきたそのきっかけは、阪神淡路大震災の被災地で経験した出来事にあった。「おばあちゃん笑顔」を見て自分が役に立つ実感を得、8カ月ほども毎日現地に通い続けたという。森川氏の活動の歴史と思いをたどった。（2022年5月31日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら

——先生は2001年、新宿での炊き出しに参加したことがきっかけでホームレスの人の支援活動を始めます。こうした活動の端緒になったことはあるのでしょうか。

元をたどれば、1995年に起きた阪神淡路大震災での経験が影響していると思います。私は2006年に日本大学医学部を卒業して医師になりましたが、その前に鍼灸などの教育機関である明治国際医療大学に入り、1996年に卒業した経歴があります。この大学は京都府にあり、私はそこで一人暮らしを送っていました。被災した隣の兵庫県には何人も学友が住んでおり、私のアパートにもひびが入りました。暇な学生生活を送っていたこともあり、自然と足が向かいました。

大地震が発生して1週間後です。「自分に何ができるのだろう」と思いながら現地に着いた私は、最初に訪れた避難所の入り口近くにいた高齢女性に話しかけました。すると、すごく喜ばれました。私は当時、鍼灸師になるために学んでいました。「マッサージはできるんですけど…」。そう話したら、「ぜひやって」。見知らぬ他人から「マッサージをさせてください」なんて、普通はあり得ないシチュエーションでしょう。しかし、その女性はすんなりと、朗らかに私を受け入れてくれました。さらに驚きは続きました。「俺も頼むよ」「私もお願い」。次々に他の方からも希望があったのです。消灯までの数時間にわたり、私は被災した方々と交流を重ねました。



ホームレスの人の医療相談に乗る森川氏（本人提供、©MdMJapan）

——それは大きな出来事ですね。こうした経験がホームレスの人の支援活動にもつながっていく？

そうだと思います。「自分が誰かの助けになる」という実感を得た私はそれから毎日、8カ月ほど被災地に通い続けました。現地に泊まることもありました。こうした経験以後、似たような活動を見学・参加し続けるうちにボランティアのマインドや行動が体に染み込んでいったように思います。今では私の性質として定着しているように思います

が、「まずは行く」「行って経験してから知る・考える」ことが自分には合っていると感じた原体験だったかもしれません。

日本大学医学部の学生時、初めて新宿での炊き出しに参加したのは、私が入っていた国際支援サークルの仲間から情報を聞いたためです。いつも通り、特別な意識を持たずその場に足を運んだ私は、震災の現場とはまた違った衝撃を受けました。寒さが肌身に染みる12月31日、高層ビルに囲まれた新宿中央公園には数百ものホームレス状態の人たちが炊き出しに集まっていました。それは、私の想像をはるかに超える光景でした。「こんなにも野宿をしている人がいるのか…」。そう、絶句したことを覚えています。最初に話しかけた人が路上生活を送りながらボランティア活動もしているという人で、自己紹介をすると親切に医療班のテントに連れて行ってくれました。

この日も、震災支援の時と同じように自分の世界が広がった感覚がありました。私は小学校から大学まで学校に通いながら生活を送ってきましたが、「ホームレス」の方の中には小学校を卒業してからずっと労働の場にいた人もいます。そこには、私から動かなければ決して出会えない人がたくさんいました。そして、そんな人たちの話を聞いていくうちに、徐々に憤りのようなものを感じ、それを解消したいと思うようになりました。

——先生が支援活動を続けるなかで感じた憤りとはどんなものだったのでしょうか。

力のない人の声が閉ざされてしまうことへの怒りです。私は活動を続けるなかで、権力やお金のあるなしによって発言力が違ってしてしまうことを知りました。路上生活を送っている人の中には幼少期に虐待を受けたり、精神疾患や知的障害を抱えたりしていることで「一般的」とされる生活を送れない人が多くいます。しかし、そんな人たちは個々の背景や理由によらず決まったシステムに組み込まれ、困ったり、苦しんだり、つらい思いをしていたりします。それは、ある種の暴力だと感じることがあります。

私は子どものころ、父に暴力を受けました。顔面を殴られ、目から出血するといったことは何度もありました。父が怖くて包丁を向けたこともあります。ホームレスの方の話は他人事とは思えませんでした。自分の人生と重なるところがありました。

——ご自身の人生が影響している部分もあるんですね。そして、今の政治に思うところもあると。

ロシアのウクライナ侵攻が続いていることもあり、「本当の民主主義って何だろう？」と最近よく考えます。私は、日本の政治は真の意味で民主主義なのだろうか疑問に感じています。多数決でものごとが決まる日本の仕組みは果たしてそうなのだろうか、と。少数意見も吸い上げて、全員が大切にされる選択肢をじっくりと考え、実行していけるような政治こそが本当の民主主義ではないでしょうか。ホームレスの方への支援活動も、そういった「高度に洗練された民主主義」のあり方を探すために行っているような気がします。

◆森川 すいめい氏

1996年に明治国際医療大学を卒業後、鍼灸院を開業したのち日本大学医学部に入学し、2006年に卒業。精神科医として久里浜医療センターや陽和病院に勤務、みどりの杜クリニックでは院長を務める。2001年からホームレスの人の支援に携わり、さまざまな活動を展開。2022年8月からは「ゆうりんクリニック」の常勤医として元ホームレスの人を診療する。支援団体「TENOHASI」「世界の医療団 日本」「つくろい東京ファンド」理事。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

